

月 刊 雜 誌

臺灣文藝

二月號

臺灣北部同好者座談會



第二卷・第二號

全集三十一

昭和二十一年一月發行



大東信託株式會社

臺中・臺北・新竹・臺南

臺灣文藝二月號 目次

第一部分（和文）

文藝藝術は大衆のものである 楊達 八

形象化について
創刊號を讀んだ感想
謝萬安直一四

擇頭する純粹文學のイリュージョンに就て…………光明靜夫（一五
明三二年十一月）

創作方法に對する關想
隨筆 ある生活觀
類 鄭
川 天
生 二二

スホーツ漫談
記丁 藤山義記
監 張
星 細
賢 城
六

馬の骨 長谷川矢江 一九〇〇年

・詩	
秋雨	丘英二二三
朝の市場	楊啓東二二三
月下微吟	江耀東二二三
戀人の肖像	楊啓東二二三

句俳	
俳句魁詠	張錫金・三六
内也まつ句	張錫金・三七
竹鶴抄	葉定城・三六
秋の風景	日高紅椿・三八

戯曲一生きんとするものゝ聲　石井三　保坂瀧雄　三九

創作閣 河辺の女房達

長篇小説創作寫真稿
オルニサ序文 郭林散水潭
一六七

創作 雜 著 (1) 場 番 七四

對臺灣新文學路線的一提案 張深初七八

魯迅傳中的誤認
文藝大眾七編

方言談屑

讀「第一線」小感
那末苦先生的言
頗明
弘九

魯傳 (1) 頑 鐸 一〇

訪問郭沫若先生
（二）

新刊文庫白百葉 (1) 田園中記 (1) 夢湘

筆
幾箇破布班 (11) 1
古玉三寶 1
木器 1
吼

詩	
一心兩岸	君
晨光集	楊
華	王
天公反常	柳
留守	林

私生兒	守
勿	守
勿	守
勿	守
勿	守
林	真
林	真
林	真
謠	童
拜月娘	呆囡仔
	甫
	甫
	甫
生	三
生	三
生	三

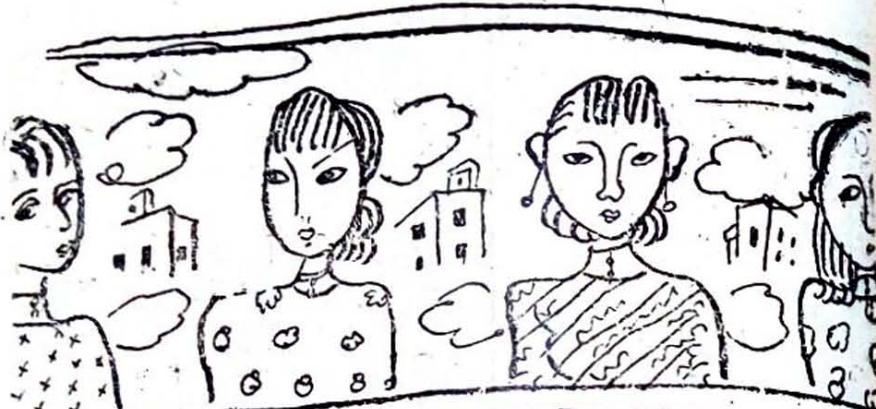
作創
熱鬧中珍風景
街頭寫真師

創作秋兒
雜兄雜弟
村姑
老聲
一三

一個勞働者的死 楊 華·一三

畫作創五年之後（一）存越案一本一四

卷之三



對臺灣新文學路線的一提案	魯迅傳中的誤認	文藝大衆化論	方言談屑	郭沫若創作
張深若	徐玉華	郭沫若	李獻瑞	雷
書八九	明弘	九五郎	九一璣	七八切
讀「第一線」小感	頑夜	九八	九一	八九若
訪問郭沫若先生	頑頑	九八	九一	七八
郭沫若先生的信	頑頑頑頑	九八	九一	九一
魯迅傳	頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
(二)	頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
訪問郭沫若先生	頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
詣同好者的面影	頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
(二)	頑頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
田園日記	頑頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
(二)	頑頑頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
幾齣破布班	頑頑頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
(二)	頑頑頑頑頑頑頑頑頑頑	九八	九一	九一
一心兩岸	君玉一二二夜嵩	九八	九一	九一
晨光集	楊華一二〇天公反常	九八	九一	九一
私生兒	守真一二一童呆	九八	九一	九一
勿々	嵩林一二三拜月娘	九八	九一	九一
熱鬧中珍風景	楊繪林一二三	九八	九一	九一
秋兒	村留守一二六	九八	九一	九一
雞兄雞弟	老甫三一二三	九八	九一	九一
五年之後	華聲一二九	九八	九一	九一
(一)	華本一四三	九八	九一	九一
一個勞働者的死	華峯一四四	九八	九一	九一
五年之後	華峯一四七	九八	九一	九一



隨筆の生活観

穎

川

生

トルストイの「結婚の幸福」は結婚前の作品であつた。これは一つの藝術的な事實である。結婚生活について誰しも書やかな事を描く。相愛し相手が異性共が一つ屋根の下に住む、勵みあふ、いたわあふ、時にはいやみを語つたりすれどして相手を流かせる。その後に来る夢のやうな抱擁……。もし天國といふものがあるとしたらそれは家庭以外に見出されない。だが、夢のあせた——そして夢は必ずあるものである——現実の結婚生活は如何に平凡になり、寒ろたへがたいものになるか、トルストイはこの宿命的な過程を説明に描いてゐる。無論トルストイのやうな繊細な感情の所有者なればこそ悲劇はひとしき深刻なものであるが、我々人の間においても、相思時代の綠色の夢と結婚時代の灰色の現實とが如何に雲壤の対照をなすかは、我々の口常見聞きするところである。結婚生活の成り行きを見きはめたトルストイではあるが、若き彼も異性を慕ひ、そして結婚した。一時彼は「結

の具體的問題には間違い様な感を得ないのである。

然らば吾々の創作問題はどうなるか。

このことは只創作問題を獨立のものとして考へることは出來ない。矢張り藝術の世界觀と一致せしめねばならぬのである。世界觀の低劣なる創作技術のみの作品は今のグルジョア作品の類ひである。ブルジョア作家に於ては創作技術のことば「天賦的才能」として神祕化してゐるし、且つ彼等のイデオロギーや世界觀は依然貧困を告げてゐるのである。——例へば創作態度に於て彼らのレアリズムは實證主義を出でてゐない。(今日この島に於ける藝術理論や創作の多くもこれと同じが多いではないか。)

で今日のこの島の實狀から——又正しき文學の水準に沿ふ爲めに次の如き創作態度を要求する。

一、唯物辯證法的世界觀を把握し社會主義アリズムをその創作方法とする。(アリズム中のロマンチズム、否定的アリズム、立體的アリズムについては他日に譲りたい。)

二、ブルジョア美學か文學論の系統的批判攝取。

三、公式主義を排し現實と先づ四つ組むこと。

四、實踐的目的といふ觀點から適度に選擇しその形式は大眾に理解され得る方法——未來派、立體派、構成派の形式主義及びこれらに共通する所のインテリゲンチャ的難澁を避けること。

五、郷土文學の形式を收入れる。

等、世界觀と藝術創作方法に就いては又言ふべき事が澤山あり詳細は前記ロゼンタールの論文やソヴェート文壇の最近の諸状勢について研究せられたいが何れにしても、現在のこの島の文學は幾分世界觀の入つた二つ三つの作品は出たけれども多くは形象の不良を見限かつてゐるからだ。……であつと言はせる作品の出現を待望する。)

ゴリキイが彼の文學修業時代に於てバルザック、スタンダール、スローベル、トルストイ、ドストイエフスキイからどれぞ多くの創作上の技術的修練を攝取したかを吾々は知らなければならぬ。(丁)

ことを後悔するであらうし、善良な人と結婚したものはされない人と結婚しなかつたことを残念に想ふであらう。幻のやうに消え去るものと知りながらも尚追求する、これは冷然たる事實である。小さな理窟を以てそれを如何ともすることが出来ない。

人間生活におけるこの宿命的な事實を異つた筆致で描いたのがバーナード・ショウである。彼の「人と超人」の中で、アン・ホアイトフィールドを毛嫌つたターナーはとう／＼アンに征服された。その時のターナーの謂草が面白い。結婚なんて馬鹿くさくてやれるものではない。だが人間はこうして「生の力」に征服されてしまふ。と、實に千古の至言である。地球の遙か彼方から見下すならば、人間生活は「あやまち」のくりかへしにすぎないであらう。生活のそれ／＼の段階において後からふりかへつて見れば無益なこと亦面するやうなことが常に充分の根據を以てくりかへされてゐる。子供のおまゝことは大人から見れば意味のないことであるが、子供の全身全靈を充す仕事である。青年ともなれば歌、酒、そして戀に青春の血潮をわかし、亂舞や失策を堂々と演じる。老人はこれを若氣の至りだと評し去るが、若人にはこの色あせた苦言は一顧に價ひしない。老年になれば人格は圓熟し人間は完成

するに至るが、同時にいき／＼した熱情は消え失ひ、人類が舌を點進せしめる動力は消盡してしまふ。人間生活の各段階にはそれ／＼の意味があり、その一つを以て他を律するわけには行かない。少年は青年の準備段階であり、青年は成年の準備段階であるといふ目的論的な見解は、人間生活を筆息せしめる。老ゲーテはこの消息を見事に説いてゐる。シルレルやその他の人の秀れた立派な脚本が演ぜられると劇場には青年や大學生の影は僅かしか見えないが、シルレルの「群盗」や「ファイエスコ」が演ぜられると劇場は學生だけで一つばかりになるといふエッケルマンの話に對してゲーテは次のやうに物語つた。「それは五十年前も今と變らぬ。恐らく五十年後も變るまい。若い人の書いたものはまた若い人に一番好かれる。世界の文化とかまた善良なる趣味とかがどれ程進歩しようと、若い人々があゝいふ粗野な時代を既に抜け出でると考へてはならない。世界が全體として進歩しても、青年は常に最初から出直し、個人として世界文化の各時期を通過せねばならない。それについて次のやうな詩を作つてゐる。

ヨハネの祭の火を止めず、
樂しみをたやすな。
筆はたえずすりへらされ、

隨筆 微風 董祐峰



子供はたえず生まれる。
たゞ窓から外をのぞけば街道を掃く帝や走り廻る子供などが永久に消耗しては永久に若かへる不變の世界の象徴として見える。子供の遊びと青年の娛樂とはそれ故に世紀から世紀へと繼續する。何故なら、彼等は大人にどんなに野暮に見えて、子供は常に子供であり、如何なる時代でも變らぬからだ。それ故ヨハネの祭の火を禁じ、愛らしい子供の樂しみを妨げてはならない。

生活の各段階の内在的意味を充分に自覺しその充實と高揚とに努めてこそ全人間生活が完ふされる。

微風はよいものである。限り無くやさしいものである。静かにく／＼吹いてくる微風はいつも人の心を甘やかな夢に誘ふ。それは人の心がしば／＼静寂を愛するからである。それは懶み多き人の世を清淨する樹である。それは丁度熟人に囁くやうな小聲で、戀人に語るやうな小聲である。

微風は青春に満ちた蒸りである。また青春の夢遠かに失ひはてた老翁には、やさしい思ひ出で過ぎ去つた夢を発芽せしめる無言の響きである。それは今日の心には悲しいけれども、しかも忘れかねた過ぎし日の麗しい移香である。

微風はよいものである。限り無くやさしいものである。それは季節にはかゝはらぬもので、夜明けて朝のうち、日暮れて黄昏の頃、それはいつも神秘に満ちて、愛があり、情がある。それは永遠の平和に人生の憂鬱をつゝみ、日日夜毎に人の心を慰撫して、悠久なる自然に祝賀を標示してやまないものである。

新年號（和文）論文

- 一、臺灣文學二九三四年回顧 楠達生
- 一、臺灣文學批判讀書會讀書會
- 一、エリサベス朝時代風潮と劇 春生
- 一、臺灣民族と自然 鳥熊
- 一、二科圖書と常識の洋書 唐川
- 一、断想錄